

「頼りにされるリーダー」から「弟子の刃に倒れたいリーダー」へ

OWCC 中川和道 20181212

次世代を育てるのは登山界に限らずどこの分野でも大きな課題である。今回は、他の分野と比較しながら、登山についてこの問題を考えてみる。次世代の登山、と考えたとき、当然のことながら、幅広く裾野を広げる方々とともに、リーダー的な方々も必要だ、中川は統合初級アルパインリーダー学校というリーダー学校をやっているのだから、リーダーをどう育てるのかについて考えることが必然的に多い、自問自答しながら考えるのは、「弟子の刃（やいば）に倒れたい」という言葉と、「頼りにされるリーダーを目指して自分を高める」という言葉だ、後者は、卓越したリーダー（カリスマリーダー）を求める考え方に通じる、時には「あんなヤツでも登らせてやった」と鼻が高すぎる発言をする人もいるが、9割引きで聞こう。自分を高める姿勢それ自体は真摯であり尊敬に値するから、

いろいろな分野の方々が「弟子の刃（やいば）に倒れたい」というこの言葉について語る、中川はある社会学系のA先生から聞いた、聞いた時、ショックを受け、また、ある種の喜びを感じた、山岳会やリーダー学校で後輩を育てるときの気持ちとあまりにも相通じるものを感じ、どこの世界でも同じだなあと、共通性・普遍性を感じたからだ、

そうだ、私（たち）は、自分をいつまでも「お師匠さん」と永遠に慕うだけの後輩を決して求めない、本来の意味とは別にして、俗に言われるお師匠さんという言葉には、山での危険や困難の予測・回避・解決をその方に丸投げし、自分についてはいくだけの安易さがうかがわれる、山は職場や都市と違って安全を前提に設計されたものではない（溝手[1]）ので、丸投げしてついていく登山を繰り返すうちに、自分が見込んだお師匠さんが解決に困る場面が出てきて当然だ、そんな時、「このリーダーについていくだけでは危ない、自立せねば」と思うだろう、中川もそうだった、お師匠さんが解決に困ったとき、お師匠さんには2つの道がある、弟子に(1)「俺を倒し前に進めるようになれ」というか、それとも(2)「弟子の文句や不安を自分がすべて解消できるように自分を高めよう」と思うか、である、登山を始めたばかりの弟子には、連れて行ってもらうことは権利であるから、(2)もいいだろう、しかし、だんだん弟子が成長してきたら、(1)がいいのではないか？むしろ、自分にはできなかったことをやれるようになった弟子と対等に楽しく酒を飲むのがいいのじゃないか？と中川は思うのだが、みなさん、いかがだろうか？

リーダー養成の激しい例に、宇宙飛行士の訓練がある、M宇宙飛行士がテレビで語るには、「飛ぶ訓練（登山なら登る訓練？）は10%そこそこで、あとの90%は、来る日も来る日もトラブル解決訓練（登山なら防御技術やレスキュー）だ」という、参考になる言葉だ、中川も勤めた大学の博士課程では、事故の訓練や起こした問題の解決が重要な内容だ、装置を暴走させて止める訓練をやるところもある、自立だけでなく、リーダーを求めるのである、

[1]溝手康史『登山の法律学』、東京新聞出版局、2007年、P.277、